

中等歴史教育における政策批判学習 ——小单元「ロシア革命の宿題」の場合（Ⅱ）——

児玉 康 弘

本稿では、筆者が「政策批判学習」の原理に基づいて開発したロシア革命と旧ソ連史についての新しい小单元を、再現と追試の可能な教授＝学習書の形で提示してゆく。その際、前稿で説明したように、主題を「穀物問題」に設定して、問題解決のためのボリシェヴィキたちの試行錯誤の過程を追体験させてゆく方法論をとる。「穀物問題」はボリシェヴィキたちにとって食糧問題であると同時に、工業化のための財源問題でもあり、旧ソ連における最大の政治課題の一つであった。時間的な射程範囲はロシア革命直後から、ソ連邦崩壊直後の1990年代までである。

Ⅰ はじめに

本稿の目的は、「政策批判学習」の原理に基づいて開発した小单元「ロシア革命の宿題」の教授＝学習計画書を提示することである。「政策批判学習」とは歴史を一つの因果関係で決定論的に説明するのではなく、社会的な問題状況における人々の選択と意志決定の過程として解きほぐして分析・追体験させる方法論である。

社会的問題をロシア革命に求めた場合、実証的な歴史研究によって、農村問題の重大性が明らかにされている。溪内謙らの積年の研究によれば、ボリシェヴィキは1920年代には農村を政治的に支配することができていなかった（参考文献9および36を参照）。農民はミール（農村共同体）の下で、土地の割変えなどの伝統的慣行によって生活し続けていたのである。したがって、ボリシェヴィキたちにとって農村問題は次の意味で最重要課題であった。第一に、都市を権力基盤とするボリシェヴィキたちにとって、広大な農村地帯にソヴィエト権力を確立してゆくことは国家権力そのものが形成できるかどうかという政治問題であった。第二に、農村から安定的に穀物を都市部へ供給できるか否かは、生存そのものに関わる重大問題であった。第三に、工業化の財源を穀物輸出に依存しようとしていたために、穀物の確保は最大の経済問題でもあった。これらの意味で、農村支配をめぐる「穀物問題」こそ、ロシア革命後のボリシェヴィキたちの最大の社会的問題であったと言えよう。

小单元は、この問題に悪戦苦闘するボリシェヴィ

キたちの試行錯誤の過程と、彼らの政策がロシアの農村に与えた影響として歴史を説明している。以下に、それを示してゆきたい。

Ⅱ 小单元「ロシア革命の宿題」の教授＝学習計画書

(1) 小单元の目標

- ①ロシア革命後のボリシェヴィキたちの最大の課題が「穀物問題」であったことを理解させる。
- ②課題解決のために「労農同盟政策」、「社会主義的原始的蓄積政策」、「自発的集団化政策」の三つの政策を模索した結果、いずれも失敗して隘路に陥ったことを理解させる。
- ③その結果、危機突破のために「上からの暴力的全面集団化政策」を強行したこと、この政策が人類史上、例のない農村世界の大惨事を引き起こしたことを理解させる。
- ④「上からの暴力的全面集団化政策」によって「穀物問題」は結局解決せず、戦後も耕地面積拡大や農民の労働意欲の喚起など様々な取り組みが行われたことを理解させる。

(2) 小单元の構成（含時間配当）

- 第1次：ロシア革命後にボリシェヴィキが直面した難題は何か？（2時間）
- 第2次：ボリシェヴィキたちはどのような解決策を考えたのか？（2時間）
- 第3次：ボリシェヴィキたちは、どの解決策をな

ぜ選択したのか？（2時間）
第4次：ボリシェヴィキたちが最終的に選択した
解決策は、どのように実施され、なぜど
のような結果となっていたのか？（3

時間）
第5次：その後のソ連の農業は、なぜどのよう
になったのか？（1時間）

(3) 小単元の展開案

	問	い	教授・学習活動	資料	生徒に確認させたい知識
第1次導入	◎ロシア革命の後、人々は、パンをお腹いっぱい食べられるようになっただろうか？		T:投げかける P:予想する	1	◎ロシア革命後の1918年1月から6月までの半年間に、首都のペテログラードでは156人もの人が病院に運ばれて餓死した。同じ頃、モスクワ北部のトヴェリ県では、県の人口240万余のうち105万4000人が飢えていると報告された。ロシアの都市では厳しい飢餓が続いていた。
展開1	○なぜ、ロシア革命後に各都市で厳しい飢餓が生じたのだろうか？		T:発問する P:予想する	2	・天災あるいは人災の原因が予想される。
	・天災による収穫の減少によるのだろうか？		T:発問する P:調べる	3	・全国的に飢餓が起きるほどの収穫量の落ち込みはなかった。
	・では、なぜ飢餓は生じたのか？		T:発問する P:考える	4	・革命後の新政権の食糧政策の失敗＝人為的な原因によると言われている。
	・失敗した政策とはどのようなものか？		T:発問する P:調べる	5	・穀物の市場価格を、非常に低く固定したこと。その他、劣悪な輸送手段の問題、組織の問題、汚職の問題などがある。
	・なぜ、低い穀物価格が飢餓を生じさせたのか？		T:発問する P:考える	6	・農民が、自分の生産した穀物を売却する価格も低いので損をすると考えて、売却するよりも保存したり、サモゴンカとよばれる蒸留酒の生産に振り向けたりした。
	・人々は、飢餓をどのようにしのいだのか？		T:発問する P:考える	6	・「かつぎや」と呼ばれる闇商人から高額で購入してしのいだ。
展開2	○農民は、なぜ革命政府に非協力的なのか？多少の損をしても、革命のおかげで皇帝や貴族の圧制から解放されたのではないのか？		T:投げかける P:考える	7	◎革命の前と後での農民の生活の様子はどう変わったのかを調べないと、非協力的であった理由がわからない。
	・貴族や大地主の所有していた土地をもらえたのではないのか？		T:発問する P:調べる	8	・それは地方権力が空白となる中で、共同体（ミール）を中心に自分たちの力で獲得していた。しかし、農家一戸あたりの所有地はあまり増えなかった。
	・なぜ、農民一戸当たりの保有地は増えなかったのか？		T:発問する P:考える	9	・農村戸数が増えたので。
	・なぜ農村戸数が増えたのか？		T:発問する P:調べる	9	・戦争からの帰還兵、都市に出稼ぎに行っていた農民の出戻り、フートル（自営農民）の共同体への再編入などによる。
・なぜ、それらの人々に土地を与えるのか？		T:発問する P:調べる	9	・ミール（農村共同体）の伝統的慣行である土地の割替制度のため。ミールでは、数年に一度、農民たちは、養うべき家族の人数（戸口）に応じてくじ引きによって、耕作する土地の交換を行い平等に生産物の確保ができるように務めてきた。耕作権のある土地からの生産物は、税を払った残りは自分の所得として自由に処分することができた。	
	○革命の前後で、農村のそのような実態に変化がないとすれば、農民は革命政府に恩を感じて、その政策に協力するだろうか？		T:発問する P:考える	10	・安い価格で穀物を売って損をするような協力はしないのではないか。
展開3	○ボリシェヴィキは、農村をどのように変革すれば穀物が手に入るようになると思ったのだろうか？		T:発問する P:考える	10	・土地をすべて国有化し、農民に平等に貸し出す。特に、没収した旧地主の土地には国営農場を設立し、国家が必要とする穀物を生産する。また、国営農場以外の自分の割当地を耕作する農民の家畜と農具は国家が独占管理をする。
	・なぜ、家畜や農具を独占管理しようとしたのだろうか？		T:発問する P:考える	11	・家畜や農具の保有量の差が、貧富の差を生じさせていて問題だ、と考えていたので。ロシアの農村社会には、次のよ

	問 い	教授・学習活動	資料	生徒に確認させたい知識
展 開	・ボリシェヴィキの計画は実行できたのか？（実行できたのなら、穀物不足は解消していくはずではないのか？）	T：発問する P：調べる	12	うな農民の貧富の差があった。貧しい順にバトラク（農業労働者）、ペドニャーク（貧農）、セレドニャーク（中農）、クラークあるいはホジャーイン（富農）である。特に、役畜（馬や牛）の保有で貧富の差は分かれていた。馬一頭を保有すればセレドニャークとみなされ、馬なし農民はペドニャークとみなされた。
	・なぜ実行できなかったのか？	T：発問する P：考える	13	・実行されなかった。地主の土地は、共同体が割替地に繰り込んだし、農具と家畜は各農戸が保有し続けた。レーニンたちボリシェヴィキ幹部はやむを得ず、それを認めた。
	・なぜ、望まなかったのか？	T：発問する P：考える	14	・農民たちは、農村の実状に詳しい社会革命党を支持していた。ボリシェヴィキたちの計画を実現するには農民の協力が必要であるが、ソヴィエトに参加する農民はまだ少なく、準備が不足していた。農民たちは計画の実現を望んでいなかった。
3	・なぜ、農民とボリシェヴィキの考え方は異なっているのだろうか？	T：発問する P：考える	15	・彼ら自身が役畜や農具をたくさん保有する豊かな農民になりたかったので。
展 開	○没収した地主の土地に国営農場を設立できなかったボリシェヴィキは、都市部の飢餓問題をどのように解決しようとしたのか？	T：発問する P：調べる	16	・農民にとっての正義（プラウダ）は、きちんと働いて、働きに応じた報酬を獲得し豊かになっていくことであった。ボリシェヴィキたちにとっては、生産手段（土地や役畜や農具）が個人のものである、というシステムそのものが不合理な社会の貧富の差を生むので、それは共有にしなければならぬと考えていた。
	・強制的な徴発は、農民にどのような影響を与えたのか？	T：発問する P：調べる	17	・農民からの強制的な徴発によって解決しようとした。これは、内戦（反革命・干渉戦争）の時代（1918-1921）に行われたので「戦時共産主義」政策といわれる。しかし、「戦時」というのは口実であって、内戦・干渉戦争がなくとも飢餓を解決するには何としても穀物を徴発する必要がある。
	・強制徴発に苦しんだ農民たちはどうしたのか？	T：発問する P：調べる	18	・その徴発が、農民自身の食糧や次年度の播種用の種子にまで及んだために、飢えと経営破綻をもたらした。
	・多くの農民と穀物をめぐる争いを展開しながら、なぜ、ボリシェヴィキは干渉戦争と反革命戦争に勝つことができたのか？	T：発問する P：調べる	19	・穀物を隠したり、反乱を起こしたりして抵抗した。タムボフ県で発生したアントーノフの指揮する大反乱がその典型である。また農民出身の兵士の多いクロンシュタット要塞（10月革命を支えた部隊）でも反乱が起きた。シベリアやウクライナでも農民反乱がおきた。
4	・ボリシェヴィキたちは、干渉戦争の終了後も、農民からの穀物の強制徴発を続けたのだろうか？	T：発問する P：予想する	20	・帝政時代の武器弾薬を掌握しているボリシェヴィキの軍事力が相対的に強かったことと、工業地帯である都市を押さえていたため。都市労働者にとっても食糧確保はボリシェヴィキと共に切実な課題であった。一方、干渉・反革命側は軍事独裁的で行政経験がなく、占領地での統治が安定していなかった。また、赤軍、白軍の両方と戦った緑軍が、結果的に赤軍を救ったこともあった。ウクライナのマフノ軍が、モスクワを危機に陥れたデニーキンの白軍を破った例がそれである。
終 結	◎強制徴発をやめたことによって、ボリシェヴィキたちは食糧問題を解決できたのだろうか？	T：発問する P：考える		・これ以上の農民や農民出身の兵士の反乱を恐れて、強制徴発は止めた。一定の税額を納めれば、残りの生産物は農民が自由に処分できるように妥協した。
				・依然として、穀物はボリシェヴィキに必ずしも協力的でない農民によって握られていた。ボリシェヴィキには、その生産や流通・分配を自由にコントロールできる力はなかった。政府は、市場価格に準ずる価格で、農民から穀物を購入して都市労働者に供給せざるをえなかった。市場経済を容認したこの政策を「ネップ」（新経済政策）という。

	問 い	教授・学習活動	資料	生徒に確認させたい知識
第 2 次 導 入	○1925年の第14回共産党大会では、食糧問題が、工業化問題と密接に関連していることが論じられた。それはなぜだろうか？	T: 発問する P: 考える	1	○工業化のためには資本が必要であったが、後進国であるソ連にとっては、穀物を輸出して外貨を稼ぐしか方法がなかったのだ。
	◎食糧としての穀物だけでも調達するのがたいへんなのに、輸出用の穀物まで確保するために、ポリシェヴィキたちはどうしたのだろうか？	T: 発問する P: 考える T: 予告する。		◎ポリシェヴィキたちは3つの主な政策を構想し、1920年代の後半に党内で論争=抗争を繰り返した。
展 開	○三つのうち、第一番目の政策とはどのようなものか？	T: 説明する	2	○ブハーリンの説いた「スムイチカ」（農民との同盟）を重視する政策で、それは「ネップ」の理論的支柱であるといわれた。
	・ブハーリンとはどのような人物か？	T: 発問する P: 調べる	3	・血の日曜日事件が起きた1905年に18才の若さで社会民主労働党に入党し、以後1938年に40才で処刑されるまで一生を革命と社会主義の建設のために捧げた典型的なポリシェヴィキ。理論家としてすぐれており、レーニンの帝国主義論や国家論に影響を与えた。また、党機関誌「プラウダ」の編集長やコミンテルンの議長等要職を歴任した。若き妻アンナ・ラーリナの父ラーリンも著名なポリシェヴィキである。
	・ブハーリンは、食糧問題で、何を述べたのか？	T: 発問する P: 調べる	4	・次の有名な言葉で、ポリシェヴィキたちに支持もされ非難もされた。すなわち、農民に対して「豊かになりたまえ」と述べた。
	・「豊かになりたまえ」という言葉で、ブハーリンは何を言いたかったのか？	T: 発問する P: 考える	5	・ポリシェヴィキは、二度と農民に対して無理な強制徴発をしないこと。農民は安心して農業生産に努力して欲しいということ。
	・それによって、ブハーリンはどのように穀物を確保しようとしたのか？	T: 発問する P: 考える	6	・第一に、豊かになった農民からの現物での税収の増加により。第二に、穀物生産の増加は市場価格を安定させるので、市場からの購入により。
	・「豊かになりたまえ」という言葉は、一部のポリシェヴィキたちから、なぜ非難されたのか？	T: 発問する P: 考える	7	・資本主義を容認していて、社会主義建設に逆行している（貧富の差を拡大する）言葉として受け止められたのだ。
	・ブハーリンは、そのような批判に対してどのように答えたのか？	T: 発問する P: 調べる	8	・第一に、社会主義建設のテンポは、現実の農村の実態や農民の願いを踏まえながらゆっくりと漸進的に行わなければならないと説いた。第二に、生産面での社会主義化すなわち土地の集団化は当面見合わせて、流通・販売・購買・信用などを共同化するための組合を作り、この組合を大きくし、活発に活動させることにより自由市場を縮小させて社会主義社会の実現を目指していくべきだと説いた。
	○三つの政策のうち、二番目の政策はどのようなものか？	T: 説明する	9	・プレオブラジェンスキーの説いた「社会主義的原始蓄積論」に基づく農業=工業政策が有力であると考えられた。
・プレオブラジェンスキーとは、どのような人物か？	T: 発問する P: 調べる	10	・1903年に19才で社会民主労働党員となり、1937年に秘密裏に処刑されるまで革命と社会主義の建設のために尽くした典型的なポリシェヴィキ。トロツキー派の経済政策面での最大の理論家といわれる。	
・トロツキーとは、どのような人物か？	T: 発問する P: 調べる	11	・10月革命の直前にポリシェヴィキとなった革命最大の功労者の一人。レーニンの死後、スターリン・ジノヴィエフ・カーメネフらの生え抜き派と争ったが敗れた。その後、今度はジノヴィエフと結んでスターリンと争った。	
・「社会主義的原始蓄積論」とはどのようなものか？	T: 発問する P: 調べる	12	・資本主義国では工業化のための資金は、労働者からの搾取や植民地からの収益で賄われた、とするのが本来の「資本主義的原始的蓄積論」である。「社会主義的原始蓄積論」はその変形・応用版で、ロシアのような後発国の場合、労	

	問 い	教授・学習活動	資料	生徒に確認させたい知識
展	・ブレオブラジェンスキーは、どのような方法で穀物を農民から獲得しようと考えたのか？	T: 発問する P: 考える	13	<p>働者は少なく、植民地は持たないので、農業に源泉を求めざるを得ないとする論。要するに、一時的に農民を犠牲にして、穀物をたくさん国家が獲得し、輸出によって外貨を獲得しなければ工業化はいつまでたっても進まないと主張した。</p> <p>・ネップの進展の中で、豊かになりつつあった農民に対して累進税率を適用して、たくさんの穀物を確保しようとした。また、市場を通じては、農民にとって必需品であるマッチや石鹸などの軽工業品を政府が実際以上に高い値段で売り、その代価としてたくさんの穀物を購入しようとした。(工業部門は国有化されていた。私的経営の続く農業部門からの工業部門への最大の資金のくみ出しをねらった政策を提案した。)</p>
	○ブレオブラジェンスキーとブハーリンの政策はどこが同じで、どこが違うのか？	T: 発問する P: 考える	14	<p>○農民の私的経営と市場を存続させる、という点は同じである。しかし、ブレオブラジェンスキーの政策は、莫大な資金を必要とする重化学工業や軍事工業を早く育成するために、農民を一時的に犠牲にしようとした点でブハーリンの政策とは異なる。</p>
	・なぜ、ブレオブラジェンスキーは、農民を犠牲にしてまで、工業化の資金獲得を急いだのか？	T: 発問する P: 考える	15	<p>・資本主義国が取り囲む中で、社会主義国を建設することに大きな不安を抱いていたので、一刻も早く工業力を身に付けることが必要であると考えていた。ブハーリンらは、たとえカタツムリや亀のようなスピードでもソ連一国で社会主義建設は可能だと考えていたが、ブレオブラジェンスキーやトロツキーらは、それではいつまでたっても私的経営部門が残り、社会主義建設は不可能だと考えていた。共同組合の拡大による市場の消滅を信じていなかった。工業は国有化されて社会主義に近づいているが、農業は私的経営が残存している中途半端な過渡期の社会主義建設段階は、不安定で危険な状態なので、他の資本主義国に革命を起こす努力をする一方で(世界革命論)、自国を防衛する実力を早く身につけるべきだと考えていた。</p>
2	・ブレオブラジェンスキーは農民を犠牲にし続けるつもりだったのか？	T: 発問する P: 考える	16	<p>・工業化に成功すれば、今度は、農民たちにも品質がよく新しい衣類や、トラクター、コンバインなどの提供ができるので農民の生活も豊かになるはずだと考えた。</p>
	○三つの政策のうち、三番目の政策はどのようなものか？	T: 説明する	17	<p>○党書記長であるスターリンの政策。</p>
	・スターリンはどのような人物か？	T: 発問する P: 調べる	18	<p>・1901年に22才で社会民主労働党員となり、レーニンの忠実な信奉者として革命に協力した。彼の本領は地味な組織者としての特徴にあると言われ、1922年に党書記長という新設のポストについてから、モロトフやカガノビチらを抜擢し、人事・配員を通じて党内の権力基盤を拡大した。晩年のレーニンは、彼の権力志向的な性質を危険視した。</p>
開	・スターリンはどのような政策を掲げたのか？	T: 発問する P: 調べる	19	<p>・それまであまり増えていなかった、コルホーズ(集団農場)、ソフホーズ(国営農場)の建設を進める政策。すなわち、農業の全面的集団化の推進政策。</p>
	・スターリンの政策は、ブハーリン、ブレオブラジェンスキーの政策とどこが異なるのか？	T: 発問する P: 調べる	20	<p>・ブハーリン、ブレオブラジェンスキーの政策は、共に農民の土地の私的経営(共同体の中で割り当てられた土地経営)を認めていた。スターリンの政策は、土地も共有化することをめざしていた。</p>
	・それは、農民にとってどのような意味を持つのか？	T: 発問する P: 考える	21	<p>・自分の生産した農産物が、自分のものとならず、農場のものとなることを意味する。</p>
・スターリンは、なぜ集団農場化が必要であると考えたのか？	T: 発問する P: 考える	<p>・集団農場は規模が巨大化して生産力が向上する一方で、国家の必要な穀物量を計画的に割り当てることができるので。</p>		

	問 い	教授・学習活動	資料	生徒に確認させたい知識
展 開 3	・スターリンは、最終的にどの程度の集団化が必要であると考えていたのか？	T:発問する P:調べる	22	・厳密な目的値はなかったが、できるだけ早くできるだけ多くの集団化が必要であると考えていた。
	・革命直後のレーニンの時代には、無理だろうと考えられたのに、なぜ、スターリンはできると考えたのか？	T:発問する P:考える	23	・ネップの進展の中で貧富の差が拡大したので貧しい農民がそれを望むようになっていたと考えたからではないか？また、ポリシェヴィキ党員数は、1924年には472000人、1928年には1305854人に増加しており、農村に派遣して指導できる人的基盤もできつつあった、と考えたからではないか？
第3次導入	◎農業問題に対するポリシェヴィキたちの三つの政策のうち、どの政策が、なぜ選ばれたのだろうか？	T:説明する P:調べる	1	◎最初に、プレオブラジェンスキーの政策が排され、次にブハーリンの政策が排されて結局、スターリンの政策が選択された。
展 開 1	○なぜ、プレオブラジェンスキーの政策は排されたのだろうか？	T:発問する P:調べる	1	○ブハーリンとスターリンが連携して反対し1927年の第15回党大会でポリシェヴィキたちが両者を支持したので。
	・なぜ、ブハーリンはプレオブラジェンスキーの政策に強く反対したのか？	T:発問する P:考える	2	・当時は、彼の理論に沿った新経済政策が実施されており、一応成功していると考えていたので。またコーエンという歴史家は、ブハーリンの性格や道徳意識から、農民を一時的にも犠牲にしようという左派の案は生理的に嫌われたのではないか、という説明をしている。
	・なぜ、スターリンはプレオブラジェンスキーの政策に反対したのか？	T:発問する P:調べる	3	・プレオブラジェンスキーがライバルのトロツキー派だったので。レーニンの発病後にジノヴィエフ・カメネフと組んでトロツキーを軍事人民委員から解任させたが、なおトロツキーは党内に隠然たる力を有していた。1925年にはジノヴィエフがスターリンと対立しはじめてトロツキーに接近したので警戒を強めていた。ジノヴィエフはレーニングラードの労働者を支持基盤としており、親農民的なブハーリンを批判し、プレオブラジェンスキーを支持した。
	・ブハーリンとスターリンはどのようにしてプレオブラジェンスキーの政策を排することができたのか？	T:発問する P:調べる	4	・党大会で、ブハーリンの政策の支持者を、559票獲得することによって。プレオブラジェンスキーに賛成の票は65票であった。スターリンは、ブハーリンを強く支持する演説をした。
	・ポリシェヴィキたちは、なぜ、圧倒的多数でブハーリンを支持したのか？	T:発問する P:考える	5	・ブハーリンと同じく戦時共産主義の強制徴発が引き起こした農民との戦争の悪夢が、まだ記憶に新しいので。
展 開 2	○なぜ、ブハーリンの政策は排されたのだろうか？	T:発問する P:調べる	6	・1927年の第15回党大会から1929年の第16回党大会にかけて、スターリンの反対によって事実上、排されていった。
	・なぜ、スターリンはブハーリンの政策を批判するようになったのだろうか？	T:発問する P:調べる	7	・1927年の穀物調達危機を境にして、ブハーリンの政策では穀物が確保できないと考えはじめたらしい。
	・1927年の穀物調達危機は、なぜ起きたのか？	T:発問する P:調べる	8	・大きく二つの理由から、農民が穀物を市場に放出せずに保存したり、家畜の飼料用にしたりした。一つは、プレオブラジェンスキーが心配したように工業化の遅れによって農村市場に魅力的な商品が出回らない状態が続いたことである。第二は、1927年はソ連にとって戦争の危機があると考えられて、価値の変動の激しいルーブルよりも穀物を保存しておこうと農民が考えたことである。
	・穀物調達危機に対して、スターリンはどのように対応したのか？	T:発問する P:考える	9	・1928年の調達には、刑法107条を中心にした非常措置を適用した。これは穀物の隠匿者を強制的に摘発する方式であった。1929年の調達では、ウラル＝シベリア方式とよばれる方法が採られた。これは表面上は共同体に自発的な穀物供出義務を負わせるやり方であったが、実際は全権代表が村の集会（スホード）で強制的に供出を決議させるやり方であった。

	問 い	教授・学習活動	資料	生徒に確認させたい知識
展 開	・その政策は、誰の政策と類似しているのか？ ・ブハーリンはどうしたのか？	T: 発問する P: 考える T: 発問する P: 考える	10	・農民、特にクラークの負担を重くしようとしている点でブレオブラジェンスキーの方法に似ている。 ・暫定措置としてやむなく最初は認めしたが、継続されてネップが事実上廃止されるにつれてスターリンとの対立が深まり、やがて党内抗争に敗れた。
	・ブハーリンはなぜ敗れたのか？	T: 発問する P: 考える	11	・穀物危機が続いたこと、政治家としての資質においてスターリンに劣っていたことなどが考えられている。
展 開	○スターリンは、非常措置とウラル＝シベリア方式を継続することができたのか？それはなぜか？	T: 発問する P: 考える	12	・できなかった。「非常措置」と「ウラル＝シベリア方式」は一定の成果を取めたが、過酷な収奪は、共同体との対決を深め、農民の生産意欲もそいでおり調達は限界に達していた。また、それは「左派」の政策に近く、「左派」の主張を正当化するおそれがあった。
	・それは何を意味するか？	T: 発問する P: 考える	13	・トロツキーらが復権し、自らが失脚することを意味する。
	・スターリンはどうしたのか？	T: 発問する P: 考える	14	・トロツキーが復権しないように、1928年アルマアタに流刑にし、さらに1929年に国外追放にした。さらに、農業＝穀物政策も独自色を出した新しいものへ転換する必要があった。
	・スターリンは、どのような新しい政策を提案したのか？	T: 発問する P: 考える	15	・前述の農業の「全面的集団化」を提案した。
	・ポリシェヴィキたちは、どう考えたのか？	T: 発問する P: 考える	16	・それは、本来のポリシェヴィキの理想であり、反対する理由はなかった。目前の食糧危機の再発に対して、他に有効な代案もないように思われた。
	・スターリンは、いつ集団化を本格的にスタートさせたのか？	T: 発問する P: 調べる	17	・一般には、1928年から始められた「五カ年計画」の一環とされているが、実際には、この計画には当初は、農業の大規模な集団化は予定されていなかった。その段階ではゆっくりとした集団化がめざされているにすぎなかった。しかし、「五カ年計画」を成功させるための穀物確保のために、集団化は加速される方向に急展開をとげていくようになった。
第 4 次 その 1 導 入	◎スターリンの全面的集団化政策は、どのように実施され、どのような結果となったのか？それは成功だったといえるのだろうか？	T: 発問する P: 予想する	1	○1977年版の世界史の教科書には、コルホーズとソフホーズの建設によって「社会主義体制の基礎をつくりあげた。」と書かれている。簡潔ではあるが成功したように読みとれる。
	○なぜ、成功したと考えられていたのだろうか？	T: 発問する P: 予想する	2	○1934年に全農家の71.4%が加盟し、1935年には83.2%が、1936年には90.5%が、1937年には93.0%が参加した。集団農場は、総数が24万5126となった。数字だけみると確かに成功している。
展 開	○集団化はスムーズに実施されたのだろうか？	T: 発問する P: 予想する	3	○スターリンは、後にチャーチルとの会談の中で、2000万人の死者を出したナチス＝ドイツとの戦いの時期よりも、集団化の時期の方が恐ろしかったと回顧している。
	・スターリンは、どのように農民を協力させるつもりだったのか？	T: 発問する P: 考える	4	○貧農（ベドニャーク）や日雇い農（バトラーク）が賛成するはずだから、彼らを推進の中心にして中農を巻き込み、反対するであろう富農（クラーク）を攻撃していけばうまくいくと考えていた。集団化率の急激な上昇を、スターリンは貧農や中農などの積極的な下からの運動の成果であると、声明していた。
	・貧農や中農たちは、協力的であったのか？	T: 発問する P: 調べる	5	・強く反対していた。彼らは個人経営を望んでいたし、集団農場での新しい生活や生産の様子がまったくわからずに恐怖感を抱き混乱していた。
	・反対する農民は、どのように扱われたのか？	T: 発問する P: 調べる	6	・貧農、中農、富農の区別なく、クラーク＝資本主義的经营をしている農民であり、社会主義建設を妨害する敵と見なされ、追放されたり、強制収容所へ送られたりした。「ク

	問 い	教授・学習活動	資料	生徒に確認させたい知識	
展 開 1	<ul style="list-style-type: none"> どれくらいの数の農民が、クラークとされて迫害されたのか？ なぜ、そこまでして1930年に「クラーク絶滅」が遂行されたのか？ 	T: 発問する P: 調べる	7	「クラーク」は階級概念ではなく、政策に反対したり非協力的であったりする者に対する呼称となった。「クラーク絶滅」とは平等な社会を建設するためではなく「全面的集団化」のための手段となった。	
		T: 発問する P: 考える	8	1930-31年の2年間だけで、38万1173世帯約200万人の農民がクラークとして流刑されているという統計がある。	
		T: 発問する P: 調べる	9	・コルホーズでの穀物生産の成否は、1930年の春の耕作・播種にかかっていた。これを成功させるためには、コルホーズ加盟に同意した農民から、さらに馬と種子を徴発しなければならなかったが、農民の抵抗が強かったので見せしめを必要とした。	
	<ul style="list-style-type: none"> 追放された農民は、どうなったのか？ 強制収容所では、どのような労働が課せられていたのか？ 	T: 発問する P: 調べる	10	・白海-バルト海運河の建設を主目的とするソロヴェツキー諸島を中心とするソロフキ収容所や、東部シベリアで金鉞山を開発するためのコリマ（ダリストロイ）収容所などで強制労働に従事させられた。	
		T: 発問する P: 調べる	11	・零下30度を越える極寒の中で、一日10時以上にも及ぶ長時間の重労働が、年に1-2度の休みしか与えられずに強制されていたことが、体験者でノーベル文学賞を受賞したソルジェニーツィンの『収容所群島』の中に記録されている。	
	○集団化率の上昇は、農民たちの自発的な農場参加の結果と言えるのか？	T: 発問する P: 考える	11	・言えない。その実態は、強制と暴力を背景にした「上からの革命」であった。	
	展 開 2	○集団農場によって、農業生産はようになったのだろうか？	T: 発問する P: 調べる	12	・集団化以前の1928年の総穀物生産量は7330万トン（一人あたり474キログラム）であるが、集団化中の1932年には、6987万トンに減少し、1934年には、6765万トンにまで落ちこんだ。また、家畜の数や畜産関係の生産も大きく落ち込んでいる。
		・なぜ、穀物生産や畜産生産は落ち込んだのだろうか？	T: 発問する P: 考える	13	・1931年の旱魃による影響もあるが、人為的な側面も大きい。たとえば、農民は食糧の配給を待てずに種子を食べたり、地区委員たちが播種面積の水増しをしたりして、翌年の生産に打撃を与えた。さらに、秋耕の遅れや不足が次年度の春の播種を減少させた。家畜は、農民自身の屠殺、過労、飼料不足により激減した。
		・集団農場に対する穀物の調達は、どのように行われたのか？	T: 発問する P: 調べる	14	・穀物生産は減少しているのに、第一次五カ年計画における重化学工業の育成のために過酷な調達が行われた。1933年のヴォルガ流域地方では、国家への全供出量は収穫の60%以上に達し、農民がその作業日あたりに受け取る穀物量は、最低必要量を下回った。
		・過酷な調達の結果、何が起きたのか？	T: 発問する P: 調べる	15	・穀物を隠そうとした農民たちはクラークとされて銃殺された。各地で暴動が頻発し、一方で深刻な飢餓が進行した。ヴォルガ川の流域では人肉食いが報告された。推定で400万人から500万人の農民が餓死したといわれている。
		○調達された穀物の輸出によって、工業化は成功したのだろうか？	T: 発問する P: 調べる	16	○第一次五カ年計画と第二次五カ年計画を通じて、1930年代のソ連では、国民経済総生産が3倍に、生産財生産が5倍に、工業製品消費財が1.5倍に増加したという推定がなされているが、ノーヴという学者は、農民から強制的に収奪した経済余剰が工業化のための蓄積源泉をなした、と主張し、定説となった。
展 開 3	・定説への反対はないのか？	T: 発問する P: 調べる	17	・ミラーという学者は、工業から農業への貢献（トラクターの供与など）を計算に入れると、かえって農業の方が工業の貢献を受けていると反論した。	
	・どちらが正しいのだろうか？	T: 発問する P: 考える	18	・現在も論争は続いており、どちらが決定的に正しく、どちらかが全くの誤りだとも言えない。しかし、工業化への農	

	問 い	教授・学習活動	資料	生徒に確認させたい知識
展 開 3	・では、工業化の成功した他の原因には何があるだろうか？	T：発問する P：調べる	19	業の貢献がノーヴの言うほどには大きくはなかったとは言えるだろう。 ・労働者の過剰な労働が生み出した剰余価値が貢献した、という考えが有力である。たとえば、1935年8月1日にドンバス炭坑の労働者のスタハーノフは、圧搾空気ハンマーを用いて一交替時間に102トンの石炭（ノルマの14倍）を採掘した。これを模範とした労働を行う運動が奨励された。また、強制収容所における奴隷的な労働も、工業化に貢献したといわれている。さらに、集団化の過程で農村から都市に流入した労働力も工業化にプラスとなった。
第4次その1終結	◎スターリンの全面的集団化政策は、成功だったと言えるのだろうか？	T：発問する P：考える		◎農業の私的経営を廃止した（生産手段を共有化した）という意味では成功した。しかし、農民たちが払った大きな犠牲、工業化に対するその犠牲の効果などを総合的に勘案すると、成功したとは言えないのではないか。しかし、その功罪は、他の側面や後世への影響など、もっと多面的に考察しなければ評価できないのではないか。
その2導入	◎スターリンの全面的集団化政策は、1930年代～1940年代のソ連の政治に、どのような影響を与えたのだろうか？	T：発問する P：予想する T：予告する		○（仮説）強引な農業集団化や急速な工業化が、ソヴィエトの政治体制にも、かなり大きな影響を与えているのではないか？
第4次その2展 開 部	○集団化政策は、農村とソヴェト国家の関係をどのように変質させたのだろうか？ ・全権代表や活動家たちは、その後、どうなったのだろうか？ ・「大テロル」とは何か？ ・なぜ、すでに失脚させられていたブハーリンたちまで処刑されたのだろうか？ ・なぜ、党員たちは、スターリンを批判しなかったのだろうか？	T：発問する P：考える T：発問する P：調べる T：発問する P：調べる T：発問する P：考える T：発問する P：考える	1 2 3 4 5	○人口の圧倒的部分を占める農民の生活を規定していた「共同体」を、党の全権代表や活動家（アクチーフ）などが解体して、集団農場に組み入れて支配するようになったことは、共産党がソヴェト国家の直接の権力の行使者として、農民一人一人を直接に支配するようになったことを意味する。これを「スターリン主義政治体制」とよぶ有力な歴史解釈がある。 ・ヴォルガ流域の責任者であったハタエーヴィチは、1937年に「人民の敵」として銃殺された。1936-38年の「大テロル」の時代には、多くの古参ポリシェヴィキと共に、ハタエーヴィチのような集団化と穀物調達に関わった活動家が犠牲者となっている。（彼らが、集団化や穀物調達の行き過ぎに対して批判的になったこと、つまりスターリンへの忠誠心が疑われたことが肅正の原因ではないかとする解釈もある。） ・1934年にキーロフというスターリンの有力な後継者が暗殺されて以来、多くの無実の人々が「反革命容疑」で逮捕・処刑された出来事。その数は数十万人に及ぶ。第一次モスクワ裁判ではジノヴィエフ、カーメネフらが、第二次モスクワ裁判ではブハーリンらが有罪とされた。古参ポリシェヴィキの大半が肅正されただけでなく、トゥハチェフスキーやブリュッヘルのような赤軍の幹部も肅正された。 ・右派や左派の政策、特に右派のブハーリンの政策の方が正しかったのではないか、とする声が大きくなるのを防ぐためではないかという説がある。 ・「大テロル」については、未だに謎が多くはっきりとした理由は解明できていない。ただ、古参ポリシェヴィキの失脚に代わって、スターリンに忠誠を誓う若い党員には出世の機会が与えられた、という点を指摘する説明もある。
終 結	◎スターリンの全面的集団化政策は、1930年代～1940年代のソ連の政治に、どのような影響を与えたのだろうか？	T：発問する P：予想する T：予告する		◎ソヴィエト国家は、本来、労働者や兵士や農民の代表が権力を行使する建前であったが、実際には共産党が権力を行使する国家となっていった。特に党中央や党書記長に独裁的な権限が集中するようになったことを「スターリン主義政治体制」という。

	問 い	教授・学習活動	資料	生徒に確認させたい知識
その3 導入	◎集団農場の経営は、その後、成功したのだろうか？	T: 発問する P: 調べる	1	○国家が割り当てた計画通りに生産をあげることができず、赤字に苦しむコルホーズが多かった。
第 4 次 展 開 部	・なぜ、コルホーズは赤字になっていったのか？	T: 発問する P: 調べる	2	・農民への報酬がきわめて低く、労働意欲のわく条件にはなかった。コルホーズは国家と機械・トラクター＝ステーション(MTS)への供出を済ませ、経営費を控除した上で、残りの僅かな生産物を年に一度だけ農民に分配した。機械やトラクターはしばしば故障したが、その修理の負担はコルホーズに負わされた。国家への供出が割り当て以下であったコルホーズの議長や会計担当者は、「組織破壊工作者」として裁かれ追放されたが、それがまた能力のある者を農村から追い出すことにつながる悪循環となった。
	・農民は、コルホーズからのわずかな配分だけで、なぜ生きていくことができたのか？	T: 発問する P: 調べる	3	・コルホーズに加入している農民には、一人0.3ヘクタールの住宅附属地における私的経営を認められていたので、そこでの経営を熱心に行って生計をたてていた。ソフホーズの加盟員には0.2ヘクタールの住宅附属地における私的経営が認められていた。
	・穀物調達の危機は、解決されなかったのか？	T: 発問する P: 調べる	4	・1939-40年度の生産は増大に転じ、9560万トンの穀物が生産された。革命後、初めて国家は十分な量の穀物を確保することができた。
	・それはなぜか？集団農場が成功し始めたのか？	T: 発問する P: 調べる	5	・独ソ不可侵条約に基づいてウクライナ西部やポーランド東部、バルト3国などを併合した結果であって、従来のコルホーズ生産が成功しはじめたからではない。
	・第二次世界大戦中から、戦後にかけてのソ連の農業には、どのような課題があったのだろうか？	T: 発問する P: 調べる	6	・①戦争によって、物的にも人的にも大きな被害を受けた。 ・②1946年には、1921年と1932年に次ぐ、三番目の大きな旱魃に襲われて、大飢饉となった。
	・それらに対して、ソ連政府はどのように対応したのだろうか？	T: 発問する P: 調べる	7	・①に対して、ドイツ軍の捕虜となったり連行されていた人々を、故郷ではなく人手の不足している西部のコルホーズで働かせる政策を行った。 ・②に対して、「自然大改造計画」に基づく大規模な植林事業を企てた。
	・それらの政策は成功したのだろうか？	T: 発問する P: 考える	8	・スターリンの最後の党大会である1952年の第19回党大会で、彼は穀物生産が1億3040万トンに達したとマレンコフに報告させたが、実際には40年実績さえ下回る9220万トンにしかすぎなかった。戦後7年間の平均穀物生産高は、7071万トンで、それは1913年の8600万トンすら下回っていた。
	・なぜ、それらの政策は、穀物増産に結びつかなかったのか？	T: 発問する P: 考える	9	・①の政策は、労働意欲を喚起しなかったのではないか。1948年にスターリンは、住宅附属地の生産物にも課税する政策を行って農民の反発を受けている。 ・②の政策は、短期間にあまりにも大規模に実施しようとしたために、一番大切な植林後の手入れが行き届かず50%以上が枯死した。
	その3 終結	◎集団農場の経営は、その後、成功したのだろうか？	T: 発問する P: 調べる	
第4次 終結	◎スターリンの全面的集団化政策は、成功だったのか？	T: 発問する P: 考える		◎スターリンの生きている時代には、政策実現のための犠牲の方が、経済的効果よりも大きく、成功とは言えないのではないか。しかし、さらに第二次大戦後の集団農場の機能や成果を長期的に調べないと、まだわからない。

	問 い	教授・学習活動	資料	生徒に確認させたい知識
第5次導入	<p>◎第二次世界大戦後に、ポリシェヴィキたちは農業問題にどのように取り組んだのか？ それらは成功したのか？</p> <p>○もし、あなたが指導者ならば、どのような政策を提案するか？それに近いことは現実に取り組みられなかったのだろうか？</p>	<p>T: 投げかける P: 予想する</p> <p>T: 発問する P: 考える</p>		<p>(?)</p> <p>○①耕地面積を拡大する。 ②集団農場の収益性を上げる。 ・農民のやる気を引き出す。 ・機械や肥料や品種を向上させる。 ③集団農場を解体し、私営に戻す。</p>
展 開	<p>①耕地面積の拡大による穀物増産という政策は、実際に行われているのだろうか？</p> <p>・フルシチョフとはどのような人物か？</p> <p>・フルシチョフの耕地拡大政策は、どのようなものであったのか？</p> <p>・処女地開墾計画は実施されたのか？</p> <p>・1956年は、なぜフルシチョフにとって政権維持がたいへんな年だったのか？</p> <p>・1956年のソ連の穀物生産は、どうだったのか？</p> <p>○処女地開墾計画の成功によって、ソ連の農業問題は解決されたのだろうか？</p>	<p>T: 発問する P: 調べる</p> <p>T: 発問する P: 調べる</p> <p>T: 発問する P: 調べる</p> <p>T: 発問する P: 調べる</p> <p>T: 発問する P: 調べる</p> <p>T: 発問する P: 調べる</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>5</p> <p>6</p> <p>7</p>	<p>①スターリンの死後(1953年)、集団指導体制を経て、フルシチョフが指導した時代(1954-64)に実施されている。</p> <p>・ロシア南部のクルスクの炭坑夫として生まれ、ドネツ炭田の炭坑で働いていた。ロシア革命後の1918年に、24才で赤軍に参加してポリシェヴィキとなった。農業の専門家ではなかったが、スターリン時代の末期にウクライナでの農業政策に成功して、スターリンに抜擢された。その方法は零細なコルホーズを合併させるやり方であったが、戦争で男性労働力が不足していたので一定の効果があった。</p> <p>・穀類の畑の面積は、1913年で1億460万ヘクタールで、スターリンの死んだ1953年には1億670万ヘクタールでありほとんど増えていなかった。そこでフルシチョフは、1954年に「穀物問題を解決する道」という政策を公表した。それは、カザフスタン、東部シベリア、ヴォルガ流域で1300万ヘクタールの処女地を開墾し、約1300万トンの穀物を増産する計画であった。</p> <p>・全国的規模の動員により30万人の志願者と、5万台のトラクターと6000台のトラックと約6億リーブルの投資によって実施された。1956年の収穫が増えるか否かが政策の成否とフルシチョフ自身の政権維持にかかっていた。</p> <p>・スターリンの個人独裁を批判した年であり、これに対する中国の抗議やハンガリー動乱を切り抜けなければならない年だった。</p> <p>・天候にめぐまれて、史上最高の豊作となった。カザフスタンだけで、2000万トンの小麦が生産され、国家は1600万トンを手にすることができた。勝ち誇ったフルシチョフは、ブレジネフを従えてカザフスタンを視察した。ブレジネフこそカザフスタンの共産党第一書記として開墾政策を指導した人物であり、彼はこの成功により党中央委員会の書記局員に抜擢され、やがてフルシチョフ失脚後の指導者となった。</p> <p>○解決されなかった。処女地は、最初は沃土であったが、手入れを怠った結果、地力が低下した。大型のコンバインやトラクターは広大なステップの表土を掘り返し、それらを乾燥させて風で吹き飛ばした。かくて1963年には天候はそれほど悪くなかったにも関わらず、土壌の浸食を主な理由としてカザフスタンでは1060万トンにまで小麦生産は落ち込んだ。フルシチョフは農政の官僚機構を改革して危機に対応しようとしたが、これがかえって幹部の反発をかい、翌1964年に失脚した。</p>
展 開 2	<p>②集団農場の収益性を上げるための政策は実施されたのだろうか？</p>	<p>T: 発問する P: 調べる</p>	<p>8</p>	<p>・1966年に、ブレジネフはコルホーズの給与制度を「残余支払い制度」から「現金支払い保障制度」に替えて、農民に物質的刺激を与えようとした。貧しいコルホーズ成員にも前渡し金が渡され、増産すればボーナスで報われた。</p>

	問 い	教授・学習活動	資料	生徒に確認させたい知識
展 開 2	・「現金支払い補償制度」には効果があったのだろうか？	T: 発問する P: 調べる	9	・ 穀物収穫高は次のように推移していて、農業生産に成長はみられなかった。 1966年 1億7120万トン 1967年 1億4800万トン 1968年 1億6900万トン 1969年 1億6200万トン
	・「現金支払い補償制度」はどのような結果をもたらしたのか？	T: 発問する P: 調べる	10	・ 生産コスト（人件費）を上昇させるので、増収がなければ コルホーズの経営は一層の赤字となり苦しくなる。1965年のコルホーズの銀行からの短期借入金は4億リーブル台で長期借入金は39億リーブルであったが1970年には前者が25億リーブル、後者が103億リーブルに膨れ上がった。
	・なぜ、農民はやる気を出さなかったのだろうか？	T: 発問する P: 考える	11	・ コルホーズは破産してもソフホーズに改組される（1966-70年の間に3184のコルホーズが破産してソフホーズに転換）ので、農民にとっては失業の心配はなかった。彼らの多くはボーナスに期待するよりも、附属地で生産物を市場で売却して収入を増やそうとした。全耕地の1.6%にすぎない農民私営の附属地が全国農業生産の30%にまで達した。
	・機械化による増収政策は行われなかったのか？	T: 発問する P: 調べる	12	・ フルシヨフの時代に、MTS（トラクター機械ステーション）を廃止して、各集団農場が直接、農業機械を保持する政策が実施された。結果的にこれは、機械購入のための莫大な赤字、修理や補修の困難さを招いて大失敗であったといわれる。
	・化学肥料の投入による増収政策は行われなかったのか？	T: 発問する P: 調べる	13	・ 努力はされてきている。しかし、広大なソ連の領土の各地域の土壤に適した化学肥料の調査と分配には、コストがたいへん高くつき困難であった。例えば、ソ連の広い農地で燐成分が不足しているが、最良の燐灰石は極地のコラ半島などにあり、主要農業地域からずっと遠方にある。
展 開 3	③集団農場を廃止して、プハーリンの政策のように私的経営を推奨する政策は試みられなかったのか？	T: 発問する P: 調べる	14	・ ゴルバチョフのベレストロイカの時代には実施されなかった。ソ連が崩壊すると、ロシア共和国ではエリツィン大統領の指導で非集団化政策が試みられた。
	・エリツィンの非集団化政策とはどのようなものであったのか？	T: 発問する P: 調べる	15	・ 1991年に「ロシア連邦の農業改革の実施を図る緊急措置例」という大統領令を出して強制的な非集団化をめざした。これは翌92年3月1日までに、すべてのコルホーズとソフホーズが個人農場に分解するか、株式制か共同組合的な企業にするかのどちらかの選択を迫るものであった。
	・エリツィンの非集団化政策は成功したのか？	T: 発問する P: 調べる	16	・ 1992年の3月に新しい大統領令「1992年春期の播種および収穫作業の編成措置令」を出した。これは、集団農場の強制的な廃止をあきらめて、それを支援する法令であった。以後、集団農場の転換（個人経営や株式会社などへ）は、その農場の成員に委ねられるようになった。しかし、その転換はなかなか進まなかった。
	・なぜ、エリツィンの非集団化政策はうまくいかなかったのか？	T: 発問する P: 考える	17	・ 様々な要因が考えられる。 ①急速で強制的な転換は、赤字の集団農場の資産の清算を困難にし、家畜の大量屠殺などの農業危機を惹起しそうになった。 ②1972年以後の国家調達テンポが緩やかになっていて、集団農場での生活水準が少しずつ向上していた。 ③ソ連解体後の市場経済の中で、集団農場が自らの穀物を有利な価格で売却しはじめたこと。 ④自営農民を希望する農民に、集団農場がよい土地を与えようとしなかったこと。 以上の他にも、自営のための資金、新設備、市場への運搬・販路の確保などリスクが多く自営農民は増えなかった。

	問 い	教授・学習活動	資料	生徒に確認させたい知識
展開 3				むしろ、集団農場がそのまま株式会社や合資会社に転換するケースの方が多かった。
第5次 終結	◎第二次世界大戦後に、ボリシェヴィキたちは農業問題にどのように取り組んだのか？ それらは成功したのか？	T:発問する P:考える		◎穀物生産を増やすために、耕地の拡大や収益の増大のための諸政策を試み続けたが、いずれも成功しなかった。ソ連邦が消滅すると、かつての私的経営を回復させる試みがなされたが、集団農場の中で生活基盤を形成していた農民たちに、かつての集団化の時と同じように拒否された。
第 6 次	◎現在のロシア等（旧ソ連）の農業はどうなっていて、その課題は何か？	T:投げかける P:調べ、考える	18	◎先進的な地域では、集団農場の株式会社等への転換が進んでいるが、その経営は必ずしも順調ではない。自営農民の土地は全ロシアの6%と増えていない。離農する農民も多く、農村の荒廃が進んでいるのではないかとされている。しかし、旧ソ連の農業の現状と課題は、さらに新しいデータに基づいて判断しないとわからない。

(4) 教授資料（紙数の関係で資料名と出典のみ記す）

第1次

- 1 飢饉の革命，文献34 pp.88-90より
- 2 革命当時の穀物収穫量，文献34 pp.88-90より
- 3 飢饉の責任，文献34 p.132より
- 4 飢饉の原因，文献34 p.132より
- 5 農民の行動，文献34 p.132-133より
- 6 「かつぎ屋」とは何か，文献34 pp.83-88より
- 7 ロシア革命は農民に恩恵をもたらしたのか？—土地を獲得したのではないかと，文献26 pp.21, および文献57 p.68より
- 8 なぜ戸数は増えたのか？，文献17 p.49
- 9 なぜ農民は帰郷した者のために土地を再配分するのか？，文献57 pp.3-6, 文献17pp.47-51などより
- 10 ボリシェヴィキの農村改造計画，文献60 pp.713-714より
- 11 役畜・農具とロシア農村における貧富の差，文献17 pp.62-83より
- 12 農村共同体による領主地の接収，文献26 pp.17-18, 文献60 pp.715より
- 13 農村におけるボリシェヴィキの影響力，文献5 pp.52-53より
- 14 農民の気持ち，文献17 pp.84-85より
- 15 農民が憎んだものと、ボリシェヴィキが憎んだもの，文献17 p.86, 『現代倫理 改訂版』清水書院，1998
- 16 穀物の強制割当徴発，文献35 pp.125-140より
- 17 穀物強制徴発の実態，文献35 pp.364-365より
- 18 農民と兵士の反乱～シベリア，タムボフ，クロンシュタット，文献35 pp.586-587, 文献61p.64より
- 19 なぜ、内戦にボリシェヴィキは勝つことができたのか？

たのか？

- ①客観的軍事力，文献41 p.242,pp.279-280より
 - ②緑軍の活躍，文献48 p.188
 - 20 穀物の強制徴発制度の廃止，文献26pp29-31より
- #### 第2次
- 1 新しい課題，文献32 pp.31-33より
 - 2 スムイチカ（労農同盟），文献33 p.35より
 - 3 ブハーリンとは？，文献62 p.495より
「党の指導者の未来の世代へ ブハーリンの遺書」，文献43（下）pp.281-284より
 - 4 1925年のブハーリン発言，文献7 p.220より
 - 5 ブハーリンの意図，文献7 p.220より
 - 6 ブハーリンの農業＝経済政策，文献7 p.219より
 - 7 ブハーリンへの批判，文献7 pp.222-226より
 - 8 ブハーリンの社会主義建設路線，文献28 p.110より
 - 9 左派の構想，文献28 p.114より
 - 10 プレオブラジェンスキーとは？，文献62 p.505より
 - 11 トロツキーとは？，文献62 p.408より
 - 12 社会主義的原始蓄積論，文献7 pp.208-209
 - 13 プレオブラジェンスキーの政策，文献7 pp.209-210, 文献28 p.127
 - 14 ブハーリンとプレオブラジェンスキーの政策の一致点と異なる点，文献7 pp.216-217
 - 15 プレオブラジェンスキーと左派の社会主義建設の危機意識，文献28 pp.118-121
 - 16 農民の一時的犠牲の行く末，文献28 p.123
 - 17 ゲンセク（書記長）の道，文献28 p.302
 - 18 スターリンとは？，文献62 p.292より
 - 19 スターリンの方針，文献9の(3) p.12より
 - 20 集団化政策の特色，文献62 pp.222-223

- 21 スターリンの期待, 文献28 p.251 p.305より
- 22 集団化の規模とテンポ, 文献9の(3) p.294より
- 23 なぜ, レーニンが集団化をあきらめたのに, スターリンは可能と考えたのか?, 文献28 pp.303-306より

第3次

- 1 政策の選択と党内抗争, 文献33 pp.258-259より
- 2 ブハーリンのプレオブラジェンスキー批判, 文献7 p.250より
- 3 スターリンはなぜブハーリンを支持したのか?, 文献32 pp.35-36より, 文献33 p.202より
- 4 どのように, 左派は政策論争に敗れたのか?, 文献33 pp.217-218より, 文献28 p.160より
- 5 なぜ, 中央委員や党員たちは, ブハーリンを支持したのか?, 文献7 p.284より
- 6 ブハーリンとスターリンの対立, 文献7 p.370より
- 7 スターリンとブハーリンの対立の背景, 文献7 p.341より, 文献28 p.144より
- 8 穀物危機はなぜ起きたのか?, 文献28 pp.149-150, 文献7 pp.322-323
- 9 穀物危機に対するスターリンの政策
<1928年の非常措置>文献9(1) pp.457-458より
<1929年のウラル=シベリア方式>文献9(2) pp.114-152などより
- 10 ブハーリンの抵抗, 文献7 pp.348-349
- 11 ブハーリンの敗北(スターリン勝利)の原因
 - ①官僚制的権力, 文献7 pp.358-359より
 - ②ブハーリンの性格, 文献7 p.493より
 - ③党員の選択, 文献7 p.384より
- 12 スターリンの「非常措置」と「ウラル=シベリア方式」の限界, 文献26 pp.48-52より
- 13 左派との関係, 文献33 p.262より, 文献28 p.216より
- 14 左派の処遇, 文献28 p.216より
- 15 スターリンの決意, 文献31 p.331より
- 16 ポリシェヴィキたちの支持, 文献28 p.309より
- 17 全面的集団化政策の起源, 文献28 pp.300-327より

第4次その1

- 1 集団化の一般的評価, 「詳説 世界史(改訂版)」山川出版社, 1977年 p.306
- 2 集団化率(集団農場に加盟した農戸の比率), 文献32 p.107より
- 3 スターリンの回顧(チャーチルの第二次大戦回顧録より1942年の会話の再現), 文献28 p.422より
- 4 スターリンの全面的集団化の方法, 文献1

- p.678, 文献9の(4) p.108より
 - 5 貧・中農のコルホーズに対する気持ち, 文献1 p.78より
 - 6 集団化の梃子=「階級としてのクラークの絶滅」, 文献1 pp.161-162, pp.152-154, pp.119-131より
 - 7 1930年—1931年にクラーク清算された農民数, 文献32 pp.51-52
表1930-31年の「クラーク追放」, 文献29 p.75より
 - 8 1930年にクラーク清算が急がれた背景, 文献1 p.93
 - 9 追放の地=強制収容所, 文献32 p.50より, 文献29 p.274より, 文献29 pp.34-38より
 - 10 強制収容所の実態
 - ①ソルジェニツィン『収容所群島』より
文献42(4) pp.571-576より
 - ②インディギルカ号の悲劇
文献29 pp.286などより
 - 11 「上からの革命」, 文献32 pp.44-45
 - 12 集団時代の農業生産
 - ①穀物収穫高と国家調達および輸出入の動向
文献32 P.62より
 - ②集団化時代のソ連邦の家畜頭数の変化
文献26 p.67より
 - 13 農業生産減少の背景
 - ①種子の不足と播種面積の水増し
文献1 pp.417-418 pp.477-478より
 - ②家畜の減少の背景, 文献1, 26, 32などより
 - 14 生産高減少の中での過酷な調達, 文献1 p.608, pp.647-648より
 - 15 飢餓
 - ①1933年3月13日 地区警察部長発一地区検事・統制委員会宛
 - ②1934年3月1日 地区検事発一管区検事宛
文献1 pp.622-625, 文献32 pp.78-86より
 - 16 ソ連の工業生産(単位10億ルーブル), 文献32 pp.146-147
 - 17 「汲み写し」の効果への批判, 文献32 pp.147-148
 - 18 ソ連工業化源泉論争, 文献55. p.173より
 - 19 労働者負担論, 文献32 p.149, 文献62 p.291より
- ### 第4次その2
- 1 集団化政策がソ連の政治に与えた影響〜スターリン主義政治体制の成立, 文献36 pp.196-198より
 - 2 集団化と穀物調達の功労者たちの運命, 文献1 pp.517-518より

- 3 大テロル, 文献54 pp.245-247より
- 4 ブハーリン処刑の背景, 文献7 p.430より
- 5 若い共産党員=農村出身のスターリン主義者たちの心理, 文献1 pp.681-682

第4次その3

- 1 集団農場の困難, 文献26 pp.91-94より
- 2 コルホーズ経営の赤字の原因
 - ①生産面での背景, 文献26 pp.78-79より
 - ②分配面での背景, 文献26 pp.83-85より
- 3 コルホーズ農民の努力は何に向けられたか? 文献17 p.347より
- 4 穀物調達の一時的増加, 文献26 p.94より
- 5 独ソ不可侵条約と領土拡大, 文献26 p.91より
- 6 戦中・戦後のソ連農業の危機
 - ①戦争による人的・物的被害
 - ②1945,46年の干ばつ, 文献26pp.100-101より
- 7 危機に対するスターリンの政策
 - ①コルホーズの再建(人的措置), 文献26p.108より
 - ②自然大改造計画, 文献26pp.113-116
- 8 戦後(スターリン時代)の農業生産, 文献26 p.125より
- 9 政策失敗の背景
 - ①コルホーズにおける住宅附属地生産への課税 文献26 pp.122-123より
 - ②自然改造計画の失敗, 文献26 pp.116-117より

第5次

- 1 耕地面積の拡大は考えられたのか?, 文献26 pp.131-132より
- 2 フルシチョフとは?, 文献62 p.504より
- 3 フルシチョフの処女地開墾計画, 文献26 p.134より
- 4 開墾事業の実際, 文献26 p.135より
- 5 勝負の年=1956年, 文献26 p.136より
- 6 フルシチョフとブレジネフの勝利 文献26 pp.132-137より
- 7 1963年の農業危機, 文献26 pp.151-152より
- 8 農民の生産意欲を高める政策 文献26 pp.266-267より
- 9 増えない農業生産, 文献26 p.268より
- 10 かさむコルホーズの赤字, 文献26 p.268より
- 11 給与制度と農民の意識, 文献26 p.268より
- 12 コルホーズの機械化, 文献26 pp.140-142より
- 13 化学肥料の投入, 文献26 pp.235-236より
- 14 ゴルバチョフの農業問題に対する考え方~回想録より, 文献63 p.242
- 15 エリツインの非集団化政策
 - ①旧ソ連時代のロシア共和国での改革, 文献26

p.326

- ②ソ連邦崩壊後, 文献26 p.328
- 16 エリツインの非集団化政策の失敗, 文献26 p.329
- 17 非集団化はなぜうまくいかなかったのか?
 - ①農業危機の原因
 - ②集団農場での生活水準の向上
 - ③市場経済の影響
 - ④集団農場からの分離の困難さ 文献26 pp.327-337より
- 18 ロシア農民の現状, 文献64 pp.72-76より

III おわりに

開発した小単元は2000年度の広島大学附属高等学校の1年生を対象に「教科発展型の総合学習」として2学期に4クラスで各10時間ずつ実施した。小単元は本質的には社会科教育としての歴史教育として開発したものであるが、現行の世界史の時間に投げ入れるには時間が足りない。そこで利用可能と判断したのが年間35単位時間の「総合的な学習の時間」である。この時間は周知のごとく生徒の興味関心と問題意識に基づいて行われるけれども、次の形で実施した。

- ①生徒と教師がそれぞれ自分の問題関心に基づいて社会的な問題を探求し、わかったことを教室で報告する。
 - ②生徒は夏休みに調査研究をして、9月~10月に毎時間4人ずつ程度レポート発表を行う。(計10時間)
 - ③教師は、「ソ連がなぜ崩壊したのか」という問題を農業問題の側面より探求して、11月~12月にわかったことを生徒に発表する。(10時間)
- 以上のように、小単元の内容は、生徒と対等な立場で教師個人が探求した一つのレポートとして提示されたのである。「教科発展型の総合学習」の一つの在り方を示したものとなっていないだろうか。なお、小単元にはたしかに専門的な内容も含まれているけれども、歴史上の人物たちの問題解決のための試行錯誤の取り組みという枠組みははっきりしており、主題そのものの理解は十分に可能であると考えられる。例えば、実施後の生徒の反応として、「北朝鮮や中国の農業政策はどうであったのだろうか、現在はどうなっているのだろうか」という問題関心の広がりが見られた。

<引用参考文献>

- 1 奥田央『ヴォルガの革命—スターリン統治下の農村』東京大学出版会 1996
- 2 R.W.デイヴィス(内田健二・中島毅訳)『現代ロシア』

- の歴史論争』岩波書店 1998
- 3 M. ウェーバー『ロシア革命論Ⅱ』名古屋大学出版会 1998
 - 4 鳥山成人『ロシア・東欧の国家と社会』恒文社 1985
 - 5 浜内謙『ソヴィエト政治史』岩波書店 1989
 - 6 長尾久『ロシア10月革命の研究』社会思想社, 1973
 - 7 コーエン『ブハーリンとポリシェヴィキ革命』未来社, 1979
 - 8 奥田央『ソヴィエト経済政策史』東京大学出版会, 1979
 - 9 浜内謙『スターリン政治体制の成立』(1~4) 岩波書店, 1970-86
 - 10 原暉之『シベリア出兵』筑摩書房 1989
 - 11 藤本和貴夫『ソヴィエト国家形成期の研究1917-1922』ミネルヴァ書房 1987
 - 12 ノーヴ『スターリンからブレジネフまで ソヴェト現代史』刀水書房, 1983
 - 13 山内昌之『神軍・緑軍・赤軍—ソ連社会主義とイスラム』筑摩書房 1989
 - 14 保田孝一『ロシア革命とミール共同体』お茶の水書房 1971
 - 15 保田孝一『ニコライ2世と改革の挫折—革命前夜ロシアの社会史』木鐸社 1985
 - 16 保田孝一『ロシアの共同体と市民社会』岡山大学文学部研究叢書 1993
 - 17 ワース『ロシア農民生活誌』平凡社 1985
 - 18 ヴォルコゴノフ『勝利と悲劇』朝日新聞社 1992
 - 19 塩川伸明『ソヴィエト社会政策史研究』東京大学出版会 1991
 - 20 ソヴィエト史研究会『ソ連農業の歴史と現在』木鐸社 1989
 - 21 ソヴィエト史研究会『ロシア農村の革命』木鐸社 1993
 - 22 原暉之・藤本和貴夫編『危機の＜社会主義＞ソ連—スターリニズムとベレストロイカ』社会評論社 1991
 - 23 高橋清治『民族問題とベレストロイカ』平凡社 1990
 - 24 ダニエロフ『ロシアにおける共同体と集団化』お茶の水書房 1977
 - 25 ヴォーリン『知られざる革命』国書刊行会 1975
 - 26 Z.A. メドヴェージェフ『ソヴィエト農業1917-1991 集団化と農工複合の帰結』北海道大学図書刊行会, 1995
 - 27 ノーヴ・A『ソ連経済史』岩波書店, 1982
 - 28 レヴィン・M『ロシア農民とソヴィエト権力(新装版)』未来社, 1992
 - 29 原暉之『インディギルカ号の悲劇—1930年代のロシア極東』筑摩書房, 1993
 - 30 袴田茂樹『ロシアのジレンマ』筑摩書房, 1993
 - 31 富田武『スターリニズムの統治構造』岩波書店, 1996
 - 32 岡田裕之『ソヴィエト的生産様式の成立』法政大学出版局, 1991年
 - 33 ダニエルズ『ロシア共産党党内闘争史』現代思潮社, 1982年
 - 34 梶川伸一『飢餓の革命 ロシア十月革命と農民』名古屋大学出版会, 1997年
 - 35 梶川伸一『ポリシェヴィキ革命とロシア農民—戦時共産主義下の農民—』ミネルヴァ書房, 1998年
 - 36 浜内謙『現代史を学ぶ』岩波新書, 1995年
 - 37 長谷川毅『ロシア革命と歴史学の課題』『講座スラブの世界③スラブの歴史』所収, 弘文堂, 1995年
 - 38 E.H. カー『一国社会主義 1924-1926』新装版 みすず書房, 1999年
 - 39 E.H. カー『ロシア革命 レーニンからスターリンへ 1917-1929年』岩波現代文庫, 2000年
 - 40 トロツキー『裏切られた革命』岩波文庫, 1992年
 - 41 リチャード・パイプス『ロシア革命史』成文社, 2000年
 - 42 ソルジェニーツィン『収容所群島1~6』新潮社, 1977年
 - 43 アンナ・ラーリナ『夫ブハーリンの思い出(上)(下)』岩波書店, 1990年
 - 44 菊池昌典『増補 歴史としてのスターリン時代』筑摩書房, 1973年
 - 45 ロイ・A・メドジェエフ『共産主義とは何か(上)(下)』三一書房, 1973年
 - 46 ロイ・A・メドジェエフ『1917年のロシア革命』現代思潮社, 1998年
 - 47 有木宗一郎『ソ連経済の研究 1917~1969年』三一書房, 1972年
 - 48 和田春樹『農民革命の世界 エセーニンとマフノ』東京大学出版会, 1978年
 - 49 塩川伸明『ソ連とは何だったのか』勁草書房, 1994年
 - 50 塩川伸明『終焉の中のソ連史』朝日選書, 1993年
 - 51 石井規衛『文明としてのソ連』山川出版社, 1995年
 - 52 R. デイヴィス『ベレストロイカと歴史像の転換』岩波書店, 1990年
 - 53 和田春樹編『ロシア史の新しい世界』山川出版社, 1986年
 - 54 藤本和貴夫・松原広志編『ロシア近現代史』ミネルヴァ書房, 1999年
 - 55 田中陽児・倉持俊一・和田春樹編『ロシア史3』山川出版社, 1997年
 - 56 浜内謙編『ソヴィエト政治秩序の形成過程』岩波書店, 1984年
 - 57 奥田央『コルホーズの成立過程』岩波書店, 1990年
 - 58 浜内謙編『ネップからスターリン時代へ』木鐸社, 1982
 - 59 ドイツチャー『スターリン 政治的伝記』みすず書房, 1984(新装版)
 - 60 江口朴郎編『ロシア革命の研究』中央公論社, 1968
 - 61 ギネス・ヒューズ/サイモン・ウェルフェア『赤い帝国 発表を禁じられていたソ連史』時事通信社, 1992年
 - 62 川端香男里他監修『ロシア・ソ連を知る事典』増補版 平凡社, 1997
 - 63 ミハイル・ゴルバチョフ『ゴルバチョフ回想録』(上巻) 新潮社, 1996年
 - 64 飯島一孝『新生 ロシアの素顔』毎日新聞社, 1997年